

病理診断科で疾患の構造を学ぶ

科目責任者：伴 慎 一（埼玉医療センター病理診断科）

I. 前文

病理診断科の部門システムには、日々実施されている病理診断症例が多数登録されており、疾患の特徴に関する膨大な情報が蓄積されています。ある疾患テーマの多数例について、それらの情報を検索・分析することで、その疾患の臨床病理学的傾向を、教科書の記載を越えた生きた情報として体験することができ、疾患に対する理解を深めることができます。

このように症例の蓄積を検索・分析する態度は、実際に医師となって患者の診療業務にあたるようになってからも、よりよい診断・治療を求めていくために常に必要なことです。さらに、対象とした疾患に関する病理標本の肉眼所見や組織所見をあわせて確認することで、疾患を形態的・実体的により深く理解する態度を養う機会になると考えています。

II. 受入可能人数

2名（異なる受け入れ期間に1名ずつ）

III. 担当教員

伴 慎 一（埼玉医療センター病理診断科 主任教授）
小 野 祐 子（埼玉医療センター病理診断科 准教授）
藤 井 晶 子（埼玉医療センター病理診断科 講師）
松 嶋 惇（埼玉医療センター病理診断科 学内講師）
佐 藤 泰 樹（埼玉医療センター病理診断科 学内講師）

IV. 学習内容

4～6学年の学生を対象とします。

夏休みなどの長期休み期間中の一週間（月曜～土曜）を利用して、担当教員の指導・補助を受けながら以下の演習を学生自身が自主的に実施します。

1. 演習のテーマとなる腫瘍性疾患あるいは非腫瘍性疾患をひとつ選択する。
2. テーマとして選択した疾患として病理診断されている例を、病理診断科の部門システム上で検索し、症例のデータベースを作製する。
3. 作製したデータベースを用いて、テーマとした疾患に関する年齢・性別・疾患部位などの臨床的事項や、組織亜型・疾患の進行度・悪性度といった病理診断項目の傾向ならびに、それらの相互の関連について分析を行う。
4. テーマとした疾患の代表的な病理標本の肉眼所見、顕微鏡的所見を確認し、重要な組織所見について組織写真撮影を行う。
5. テーマとした疾患に関する以上の検討結果をレポートとしてまとめ、その内容のプレゼンテーションを行う。

V. 学修の到達目標

1. 対象の疾患症例に関するデータベースを作製できる。
2. 症例データベースの各項目を分析して、対象疾患における傾向を把握できる。
3. 症例データベースの項目相互の関連を分析して、対象疾患における傾向を把握できる。
4. 症例データベースの症例内亜群間を比較・分析して、各亜群の特徴を把握できる。
5. 症例データベースの分析により明らかとなった対象疾患の特徴を説明できる。

VI. 成績評価の方法・基準

演習内容をまとめたレポートの提出ならびにプレゼンテーションの実施を最低限必要な必須項目（60点）とします。

その上で、レポート・プレゼンテーションの内容の評価に応じて加点し、100点満点で成績評価を行います。

VII. 使用する教材・資料など

1. ノート型パソコンを所有している場合は、持参いただけると好都合です。その他に学生自身が必ず持参・準備しなければならないものはありません。
2. 病理診断科に揃っている各分野の病理学・病理診断に関する成書を自由に閲覧することができます。
3. 病理診断科内で、Webサイト上での資料・文献の検索を行うことができます。
4. 閲覧すべき成書や文献等に関しては、演習実施時に担当教員が指導します。

VIII. 質問への対応方法

演習は病理診断科内で集中して実施しますので、近くにいる担当教員に随時、質問することができます。

IX. 求められる事前学習、事後学習* () 内は所要時間の目安

事前学習 (予習), の必要はありません。

事後学習として配布資料等をもとに講義の内容をまとめてください (30分程度)。

X. コアカリ記号・番号

A-2-1, A-2-2, A-8-1, A-9-1, B-1-1, B-1-2, F-2-2, F-2-4

XI. 課題 (試験やレポート) に対するフィードバックの方法

演習の一環として学生が作製したレポートは、科目の実施期間中に評価するとともに、その場で学生にフィードバックします。

XII. 卒業認定・学位授与の方針と該当授業科目の関連

*◎：最も重点を置くDP ○：重点を置くDP

ディプロマ・ポリシー (卒業認定・学位授与の方針)		
医学知識	人体の構造と機能、種々の疾患の原因や病態などに関する正しい知識に基づいて臨床推論を行い、他者に説明することができる。	○
	種々の疾患の診断や治療、予防について原理や特徴を含めて理解し、他者に説明することができる。	
臨床能力	卒後臨床研修において求められる診療技能を身に付け、正しく実践することができる。	
	医療安全や感染防止に配慮した診療を実践することができる。	
プロフェッショナリズム	医師としての良識と倫理観を身に付け、患者やその家族に対して誠意と思いやりのある医療を実践することができる。	
	医師としてのコミュニケーション能力と協調性を身に付け、患者やその家族、あるいは他の医療従事者と適切な人間関係を構築することができる。	
能動的学修能力	医師としての内発的モチベーションに基づいて自己研鑽や生涯学修に努めることができる。	◎
	書籍や種々の資料、情報通信技術 (ICT) などの利用法を理解し、自らの学修に活用することができる。	◎
リサーチ・マインド	最新の医学情報や医療技術に関心を持ち、専門的議論に参加することができる。	○
	自らも医学や医療の進歩に寄与しようとする意欲を持ち、実践することができる。	○

六学年

社 会 的 視 野	保健医療行政の動向や医師に対する社会ニーズを理解し、自らの行動に反映させることができる。	
	医学や医療をグローバルな視点で捉える国際性を身に付け、自らの行動に反映させることができる。	
人 間 性	医師に求められる幅広い教養を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	
	多様な価値観に対応できる豊かな人間性を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	